中央図書館ギャラリー企画展示報告(2003-2004年度)と貴重書紹介

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学図書館 公開日: 2008-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平田, さくら メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/426

中央図書館ギャラリー企画展示報告 (2003-2004年度)と貴重書紹介

平田　さくら*

新・中央図書館がオープンして早4年が経とうとしている。中央図書館の入口に位置するギャラリーでは、この4年間で企画展示を8回、スペース貸出を1回実施した。『図書の譜』7号 (2003年3月刊) にて、開館記念展示から第3回までの展示報告を行ったが、今回はそれ以降、2003年度から2004年度にかけて開催した展示について報告したい。この間の特記事項としては、2004年度より「中央図書館ギャラリー企画運営WG」が立ち上がり、ギャラリーの企画運営にあたることになったことが挙げられる。WGは総合サービス課、図書館庶務課、整理課の計7名の委員で構成され、企画、設営、パンフレット作成など一連のギャラリー運営業務にあたっている。第6回の図書の文化史 (2004) からこのWGの活動をスタートした。

今回の報告は2部構成で、前半で各展示について概要を記録し、後半でこの2年間の企画展示で初めて紹介された貴重書の資料解説を掲載した。概ね2002年度の新収貴重書であるが、一部2003年度分も含んでいる。解説については、個々の展示開催時に作成したパンフレットに前述のWGメンバーが分担執筆したものを転載させていただいた。

展示パンフレットは、図書館ホームページの「OPEN! ライブラリー」のページでも公開しているのでご参照いただきたい。

展示情報　http://www.lib.meiji.ac.jp/openlib/gallery/index.html

*ひらた・さくら／図書館事務部総合サービス課

1　企画展示 (2003～2004 年度)

1.1　第 4 回 図書の文化史　2003 年 5 月 26 日 (月)～7 月 31 日 (金)

2002 年度に引き続き、司書課程の「図書および図書館史」の授業と連動して展示を行った。文字や書写材料の歴史、写本から印刷への変遷を原資料やファクシミリ版を用いて時代を追って展示した。ダンテ『神曲』(1502 年 ヴェネチア アルドゥス・マヌティウス版)、偽ディオニシオス・アレオパギタ『著作集』(1502-1503 年 ストラスブール) などの 16 世紀刊本が新たに加わった。

1.2　8000m への足跡 －マッキンリーからアンナプルナ I 峰へ－　2003 年 8 月 4 日 (月)～11 月 30 日 (日)

2003 年 5 月 16 日、明治大学山岳部炉辺会による「明治大学アンナプルナ I 峰登山隊 2003」が南壁からの無酸素登頂に成功した。これによって、明治大学創立 120 周年・山岳部創部 80 周年を記念して 2001 年から展開してきた山岳部出身者によるヒマラヤ 8000m 峰全 14 座登頂というドリームプロジェクトが見事成功裡に終了した。明治大学および山岳部炉辺会では、これらの挑戦と栄光の記録を「ヒマラヤ 8000m 峰 14 座完登」と題し、リバティタワー 23 階の岸本辰雄記念ホールで 8000m 峰の登頂シーンや登山装備などの展示を 2003 年 7 月から 11 月末まで行った。図書館でも、ギャラリーのスペースを提供し、炉辺会の会誌や写真、植村直己氏の著作などを展示した。

1.3　第 5 回 新収貴重書展　2004 年 3 月 10 日 (水)～5 月 15 日 (土)

2002 年度に新たに蔵書となった資料のうち、貴重書をメインに展示した。特別資料費や学習用基礎資料費で購入した資料のお披露目もかねている。これらの予算は、長年に渡って収集し、既に特色あるコレクションを形成している分野や、「司書・司書教諭課程」の授業で取り上げられる、出版史上エポックになる資料の購入などのために設けられた予算である。洋

書ではダンテ『神曲』(1502 年)、ホッブス『リヴァイアサン』(1651 年)、彩色写本芸術の白眉『ボルソ・デステの聖書』のファクシミリ版、和書では伏見版 (古活字版)2 点『孔子家語』『七書』、『百鬼夜行絵巻』などを展示した。

1.4　第 6 回 図書の文化史 (2004)　2004 年 7 月 5 日 (月)〜7 月 31 日 (土)

2003 年度に引き続き、「司書・司書教諭課程」と連動して開催した。新たに蔵書となったインキュナビュラのアウグスティヌス『神の国』(1473 年 マインツ) が展示された。また初の試みとして、日本の印刷史のコーナーを設け、世界最古の印刷物のひとつである『百万塔陀羅尼』や五山版の『禅林類聚 20 巻』などを展示した。

1.5　第 7 回 経済学の古典 －本学所蔵原本とリプリント版展示－　2004 年 10 月 19 日 (火)〜12 月 4 日 (土)

ドイツの出版社 Verlag Wirtschaft und Finanzen が企画出版した『Klassiker der Nationalökonomie』(全 100 巻) は、経済学の古典を刊行された当時の体裁のまま復刻した叢書であり、スミス『国富論』からマルクス『資本論』、ケインズ『雇用・利子および貨幣の一般理論』まで、文字通り現代の経済に大きな影響を与えた名著が収められている。この 100 点を一同に集めて展示することで、このような資料の存在を広めて、学習・研究の利用を促進したいという目的で開催した。

1.6　第 8 回 「布施辰治・自由と人権」資料展　2005 年 1 月 13 日 (木)〜2 月 28 日 (月)

本学 (明治法律学校) を明治 35 年に卒業した故・布施辰治弁護士 (昭和 28 年死去) が、朝鮮人の人権擁護活動の功績により、2004 年 12 月 21 日、韓国の「建国勲章」を授与された。日本人の授与は初めてのことで、韓国

のメディアで布施氏は「日本のシンドラー」と称えられ、その功績が高く評価された。本学卒業生の栄誉ある授章を記念して、法学部により 2005 年 1 月 13 日にシンポジウムが開催された。このシンポジウムと連携して、図書館が所蔵する布施辰治旧蔵資料の公開・展示を行った。布施氏の生地石巻市の石巻文化センターからも資料の提供を受け、著作や様々な関連資料、写真、裁判記録などで布施氏の業績を広く知らしめる展示構成となった。布施辰治旧蔵資料については、『図書の譜』第 2 号掲載の中村正也・今井昌雄執筆「明治大学図書館所蔵弁護士布施辰治旧蔵資料」に詳しい。

2　貴重書紹介 (展示パンフレットより転載)

2.1　洋書

ダンテ『神曲』1502 年 ヴェネチア アルドゥス・マヌティウス版 091.3/887//H
Dante Alighieri(1265-1321) Le terze rime di Dante.
Venetiis : In aedib[us] Aldi Accuratissime, 1502

本書は、小型本やイタリック体を考案したことで知られる出版人アルドゥス・マヌティウス (Aldus Manutius, 1450-1515) が印行したダンテの『神曲』である。

『神曲』はアルドゥス版以前にも、1472 年の初版をはじめとして数種の刊本が知られているが、それらは二折判の大型本であった。1502 年に刊行された本書は『神曲』初の小型本 (八折判。今日の文庫本ほどの大きさ) であり、小さくて読みやすく通常の出版物よりも廉価なため『神曲』の普及に大きな役割を果たした。

アルドゥス版『神曲』には 1502 年 8 月の初版と 1515 年 8 月の第 2 版があり、前者の初版第 2 刷の最終葉の裏頁には、アルドゥス工房の商標である「錨にからみつくイルカ」があるが、初版初刷の本書には無い。

偽ディオニシオス・アレオパギタ 『著作集』 1502-1503 年 ストラスブール
091.3/890//H
Pseudo-Dionysius, the Areopagite
Opera Dionysii Strasbourg : [s.n.], 1502-1503

「ディオニシオス文書」のラテン語訳 (原文はギリシア語)。この文書は 6 世紀前半よりキリスト教思想界に流布し始め、その著者は使徒パウロの説教を聞いて回心したアテネのアレオパゴスの裁判官ディオニシオス (1 世紀の人物) であるとされてきた。しかし 19 世紀後半に至ってようやくこの文書が 6 世紀初頭に成立したことが確定され、それ以後 Pseudo-(偽りの) を冠するのが通例となった。著者の偽ディオニシオスは、6 世紀頃のシリアの修道僧であろうと推定されている。文書は『天上位階論』・『教会位階論』・『神名論』・『神秘神学』の四篇と書簡十一通か

ら構成されている。この新プラトン派の思想に近い文書は、中世から近代初期に至るまでキリスト教神学に大きな影響を及ぼした。

本書は三巻合綴。第一巻の前半 (『天上位階論』) に続いて第二巻と第三巻があり、第一巻後半は巻末に製本されている。書肆の名は記されていない。装丁は改められているが、かつての羊革装も部分的に残っている。

ビュデ 『ギリシア語考』 1529 年 パリ 091.3/886//H

Budé, Guillaume(1468-1540) Commentarii linguae Graecae.
［Paris］: Venundantur Iodoco Badio Ascensio, 1529

16 世紀初頭のフランスの人文学者ギヨーム・ビュデの主著の一つ。フランスにおける古典学がもたらした記念碑的な作品。ギリシア語の辞典編集・語源・言語史についての記録を集成したもので、フランスにおけるギリシア語研究の礎となった。この書は数回の版を重ねビュデの名声を高めた。印刷はパリのジョス・バード (Josse Badius, 1462-1535)。手動印刷の様子を描いた有名なジョス・バード工房の商標が標題紙を飾っている。また、標題紙にトマス・ボール (Thomas Ball) との署名がある。

ホッブス 『リヴァイアサン』 1651 年 ロンドン 091.3/894//H

Hobbes, Thomas(1588-1679) Leviathan: or the matter, forme, and power of a common-wealth ecclesiasticall and civill.
London : Printed for Andrew Crooke, at the GreenDragon, 1651

市民革命期イギリスの代表的政治思想家ホッブスの主著で、社会契約説を打ち出した書。初版の口絵は、「リヴァイアサン」の擬人化した姿を象徴的に描き出している。本書には「1651 年」刊とされている版が三種類あり、タイトルページの飾りに「人の頭」「熊」「装身具」とそれぞれ違う図案が使われている。チャールズ二世時代に復刻が禁止されたため刊年を変えて出版されたという。本学で所蔵しているのは、最初にロンドンで出版された「head」(人の頭) 版である。牛革装。クーパー伯爵旧蔵、18 世紀前半の製作と思われる、紋章の入った蔵書票がある。

リコルド 『1812-13 年の日本航海記』 1816 年 サンクト・ペテルブルク 092.3/469//H

Rikord, Petr Ivanovich(1776-1855) Записки флота капитана Рикорда : о плаваніи его къ японскимъ берегамъ въ 1812 и 1813 годахъ, и о сношеніяхъ съ японцами.
Въ Санктпетербургѣ : Въ Морцкой типографіи, 1816

ロシア海軍のディアナ号艦長ゴローヴニン (Golovnin, Vasilij Mikhailovich, 1776-1831) ら一行は、1811 年択捉・国後両島を測量中、日本側に捕えられ、松前と箱館に監禁された。艦長代理となったリコルドは、報復として翌年観世丸に乗船した高田屋嘉兵衛 (1769-1827、海運業者) らを国後島で拿捕、カムチャッカへ連行したが、紛争解決のための嘉兵衛の尽力もあり、1813 年日本側と和解し、ゴローヴニンらは釈放された。本書はリコルドが日本側と交渉した経緯を記録した手記で

ある。石版刷の高田屋嘉兵衛の肖像が付されている。19 世紀における日露の外交交渉を克明に記録した生の史料として極めて重要であると同時に、高田屋嘉兵衛という人物を通じた日本人論ともなっている。※『らいぶ No.5』にて詳細に紹介

ガルニエ 『インドシナ踏査記』 1873 年 パリ 4 巻 (内図録 2 巻) 092.3/524//H
Garnier, Francis(1839-1873) Voyage d'exploration en Indo-Chine : effectué pendant les années 1866, 1867 et 1868. Paris : Librairie Hachette, 1873

1866 年から 1868 年にかけてフランス海軍によって執り行われたメコン川流域調査隊の報告書。当時フランスはインドシナ半島の大半を「フランス領インドシナ」として植民地化していた。チベット高原に源を発する世界第 11 位の大河メコン川が、インドシナ半島から中国に入る通商路になりうるかの遡航調査であった。探検は困難を極め、副司令官であったガルニエもチフスで死にかけたが、無事フランスに戻り、英雄として迎えられた。第 1 巻には調査隊の記録とアンコール・ワットの遺跡の描写、カンボジアの歴史、第 2 巻は天文学及び気象学的観測、地質学、鉱物学、人類学、農業、言語などの分野に関する報告が収められている。特にアンコール・ワットの威容や秀麗な彫刻群を描写したドラポルト大尉による銅版画は、ヨーロッパ人にアンコール・ワットの全貌を初めて紹介し、19 世紀の科学的調査の中でも高い評価を得た。800 部作成されたが、完本で残存するものは極めて珍しい。※『らいぶ No.4』にて詳細に紹介

アウグスティヌス 『神の国』 1473 年 マインツ 091.3/914//H
Augustinus, Aurelius(354-430) De civitate Dei.
Mainz : Peter Schoeffer, 5 Sept. 1473

410 年「永遠の都」と信じられてきたローマが西ゴート族によって 3 日に 渡って占領略奪された時、当時相次いだ国家の大災害は、 古いローマの神々を忘れてキリスト教を信じたためであるという非難がローマ人異教徒の間に再燃した。それに対して、本書は神の国 (天の国) と悪魔の国 (地の国、または世の国) を対立させることによって、大規模なキリスト教擁護論を展開する。護民官マルケリウスの求めによって、ローマ・カトリック教会の四大教父の一人であったアウグスティヌスが 413 年に執筆にとりかかり、426 年までに 13 年を費やして全 22 巻を書き上げたもの。

マインツのペーター・シェファー刊。26 個のイニシャルに 青や赤の彩色が施されている。シェファーは活版印刷術の祖グーテンベルクと並ぶマインツの初期印刷者。 グーテンベルクの下で活版印刷術を学び、後にヨハン・フストが借金の抵当にグーテンベルクから取り上げた印刷機械や活字類を引き継ぎ、フストの娘と結婚し、印刷所所有者となった。奥付 (コロフォン) の記入、書物のページ付け、印刷人マークを用いる、など今日の出版の基礎を築いたとして高く評価されている。本書の奥付 (コロフォン) は鮮やかな赤で印刷され、フストシェファー印刷工房のマークが見える。装幀は当時の豚革装。※『らいぶ No.7』にて詳細に紹介

2.2　和漢書

標題句解孔子家語 (ひょうだいくかいこうしけご) 6 巻附素王事紀 1 巻 (4 冊, 附巻 1 冊欠) 慶長 4 年 (1599) 伏見版 091.1/15//H

伏見版とは、慶長 4(1599) 年から 11(1606) 年までの 8 年間、徳川家康が京都伏見の円光寺の閑室元佶 (かんしつ・げんきつ 1548-1612) に、10 数万個の木活字を与えて兵書を中心に刊行させた書物をいう。円光寺は家康が元足利学校第 9 代庠主の閑室元佶に命じて足利学校の分校として創建させた。

本書は伏見版として最初に刊行されたもの。慶長 4(1599) 年には、本書のほかに『六韜』『三略』が刊行され、いずれも巻末に閑室元佶の刊語があり、出版目的と経過などが示されているが、残念ながら本書は附巻『素王事紀』の 1 冊を欠くため確認できない。内容は、礼・楽・制度などに関する孔子と弟子らとの問答、及び彼らの行事の記録を主とする。本文に読みの朱引あり。

七書 (しちしょ) 25 巻 (合冊 2 冊) 慶長 11 年 (1606) 伏見版 091.1/16//H

伏見版としては最後に出版された書物。伏見版『七書』は、初版印刷後、ほとんど同時に同種活字を用いて再度印行された異版のあることが、現存する伝本の比較で明らかになっている。前者は東洋文庫蔵本などがあり、後者は安田文庫蔵本が知られている。本書は異版に当たる。『七書』最初の和刻本でもある。『七書』とは 11 世紀初頭、中国の北宋年間に代表的兵法書 7 種を選んで「七書」と称し、軍事学の基本的経典と定められたのに始まる。本書は合冊されており、第 1 冊に『孫子, 3 巻』『呉子, 2 巻』『司馬法, 3 巻』『尉繚子, 5 巻』、第 2 冊に『黄石公三略, 3 巻』『六韜, 6 巻』『唐太宗李衛公問対, 3 巻』を収める。『孫子』の上巻第 3〜5 の 3 丁を欠く。

家康は翌慶長 12(1607) 年春、駿府に退隠したので、『七書』を以って伏見版の印行は終わっている。

百鬼夜行絵巻 (ひゃっきやぎょうえまき) 1 巻 書写者不明 江戸中期以降写 091.6/30//H

『百鬼夜行絵巻』は、妖怪が列をなして夜行するさまを描いた絵巻の総称だが、ここに登場する妖怪は、動物が化けたとおぼしきものや、「付喪神 (つくもがみ)」といって、年を経て捨てられた道具の化物たちである。室町時代に成立し、近世にかけて流布した。もっとも有名なのが、京都の大徳寺・真珠庵が所蔵する室町時代の大和絵の名手・土佐光信によるという伝承をもつ 1 巻である。現存する諸伝本の多くは、この真珠庵本系統の絵巻の写しと見られるものである。それとは別に、基本的には真珠庵本と同じ図様をもつが、妖怪の構図や配置、描かれる妖怪の種類や数、彩色が異なる伝本が存在する。その 1 つが東京国立博物館所蔵本 (江戸後期写) であるが、本学所蔵本はこの東博本と同じ図様、画面構成をもつ絵巻である。

真珠庵本と比較して、もっとも大きな違いは巻首部分と巻末部分である。巻首は、妖怪が三々五々登場しては左方向へ向かう場面から始まっており、この部分は真珠庵本にはない。巻末、真珠庵本が灼熱の太陽で終わるのに対し、東博本と

本学所蔵本は、太陽の図の後にかき曇った大空の彼方に黒々と巨大な兎・龍・狐などの影がむくむくと湧きあがる一図を有する。また、東博本と本学所蔵本は動物が化けたとおぼしい妖怪がかなり多いが、真珠庵本は器物妖怪がほとんどであるのも特徴的な違いである。本絵巻の書写者は不明であるが、細部まで精緻な彩色が施されており、練達した絵師によって模写されたことがうかがえる。江戸中期以降の作品ではないかと推定される。(巻頭カラー口絵 4 参照)

2.3　江戸文藝文庫

武者修行木齋伝 (むしゃしゅぎょうもくさいでん) 後編 (1 冊) 滝沢馬琴自筆稿本 文化 2(1805) 年写 913.57/TA1-53//H

文化 3(1806) 年正月に刊行された『武者修行木齋伝』の後編三編の滝沢馬琴 (1767-1848) 自筆草稿本である。本文第 3 丁表左端に「文化二年乙丑夏四月下旬著述同三年丙寅正月發行」とあって、本書が文化 2(1805) 年 4 月に著述されたことが示されている。この作品は天狗に武芸を習った須藤木齋の 10 年に渡る武者修行を語ったもので、予定通り同 3 年正月の新作黄表紙として歌川豊広 (1773-1828) の挿画入りで江戸、鶴屋喜右衛門から刊行されている。本書には全丁にわたって挿画が描かれているが、これは馬琴自ら筆をとり画家 (豊広) への指示としたもので、構図及び人物の動作・小道具などを示すために描かれたものである。

夏野花味狭藍草紙 (なつのはなあじさいそうし) 第 2 編下冊 (1 冊) 笠亭仙果自筆稿本 江戸末期写 913.57/RY2-8//H

笠亭仙果 (1804-1868) の自筆稿本。表紙の記述から、本書は『夏野花味狭藍草紙』の第二編下冊として、歌川国貞 (1786-1864) の挿画入で江戸・山本屋平吉から刊行の予定だった絵草子の草稿と推定されるが、出版された形跡がなく、未刊で終わったのか、あるいは改題され刊行されたのかは不明である。本文は全 10 丁、挿画も仙果の筆になり、全丁に描かれている。胡粉 (白色の顔料) を塗っての訂正や朱筆訂正及び大小紙片の貼り込みによる改訂が見られる。

河童相伝胡瓜遣 (かっぱそうでんきゅうりづかい) 初編 2 冊 仮名垣魯文自筆草稿 明治 5(1872) 年頃写 913.55/KA1-1//H

仮名垣魯文 (1829-1894) の自筆稿本。明治 5(1872) 年に河鍋暁斎の挿画入りで萬笈閣から刊行された。書名は、当時好評だった福沢諭吉の『窮理図解』を『胡瓜遣』ともじったもので、内容的には『窮理図解』とまったく関係がない、例えば福沢の「空気の章」が「食気の事」となって大食漢の話になっているなどの滑稽な話であったが、明治初年の開化風俗を描き、読者の興味を引いた。本文には貼紙や朱筆で訂正がある。挿画も魯文自身が画家 (暁斎) に対して指示するために描いたもので、上下巻合わせて見開き 7 図、半葉 5 図が挿入されている。なお、目録末には二編の予告を記しているが、未刊に終わっている。

2.4　日本近代文学文庫

平出修 (1878-1914) 『法律上の結婚』 明治 35(1902) 年 11 月 新声社刊 四六判 紙装 20 銭 MB100/HI8-3//W

著者は明治 11(1978) 年、新潟県に生まれ、大正 3(1914) 年、35 歳の若さで亡くなっている。しかし、歌人、小説家、評論家にして弁護士でもあった著者の約 15 年の業績は多大である。別号は、露花、黒瞳子。明治 33(1900) 年、高田市の弁護士平出善吉の妹ライと結婚し、平出家に入籍。翌年上京し、義兄の母校である明治法律学校 (現明治大学) に入学、36(1903) 年卒、38(1905) 年に北神保町に法律事務所を開いた。一方学生時代から文学活動にも熱心で、評論などを発表、その後『明星』の同人、『スバル』刊行の一員でもあった。後に大逆事件被告の弁護をし、その時の資料と経験をもとに『畜生道』などの小説を書いた。

本書は明治法律学校在学中に平出露花の名で刊行、婚姻法を言分一致体、平仮名の文章で説明したものである。岸本辰雄校長が序文で「平易ナル解釈ヲ施シ、市井閭巷ノ間ニ向ツテ法律ヲ説クハ其人頗ル稀ナリ」と書いている。

児玉花外, 山田枯柳, 山本露葉著 『風月万象』 明治 32(1899) 年 6 月 文学同志会刊 四六判 紙装 35 銭 MB100/KO6-7//W

児玉花外 (1874-1943)、山田枯柳 (生没年不明)、山本露葉 (1879-1928) の合著詩集。「麦笛」(児玉花外)、「柳影集」(山田枯柳)、「葡萄の葉陰」(山本露葉) の三集から成っている。各集は個別に目次を持ち、頁を付けており、独立した形式をとっている。花外、露葉は東京専門学校 (現早稲田大学) の同窓生。出版元の文学同志会は露葉が出版事業を行っており、住所も神田区錦町 1 丁目 8 番地の露葉方であった。花外、露葉にとっては第一詩集。露葉の「葡萄の葉陰」には花外の結婚に寄せた祝いの詩 (「玉椿」) も収録されている。

児玉花外は明治期の詩人で、社会主義詩人グループの代表的存在。『社会主義詩集』が刊行直前に詩集として初めて発禁となった。明治大学校歌の作詞者としても知られる。

山本露葉は詩人、小説家。本集で抒情詩人として出発。

山田枯柳は翻訳家、詩人。啓蒙的評論の執筆のかたわら、ロシア文学の翻訳紹介などを行っていた。

西條八十 (1892-1970) 『西條八十詩集』 昭和 2(1927) 年 12 月 第一書房刊 A5 判 紅色総革全面金泥模様装 花模様刻天金貼函付 5 円 MB100/SA3-9//W

赤い染革に金箔が施された美しいこの詩集は、長谷川巳之吉の主催する第一書房が、当時相次いで出版していた豪華本詩集の一冊。初版は 1700 部。再版は初版よりも豪華で、500 部発行のため残存数が限られ初版よりも貴重である。本書は初版本だが、保存完全本は数少なく貴重である。西條八十決定版ともいえる本書には、処女詩集『砂金』、第 2 詩集『見知らぬ愛人』のほとんどの詩作品と童謡、抒情小曲等が収録されている。その詩はロマン的・幻想的である。西條八十は詩人としてだけではなく、童謡、民謡、歌謡の作詞者としても活躍。「かなりあ」、「鞠

と殿さま」、「同期の桜」、「東京行進曲」、「青い山脈」など有名曲多数。本学の校歌の歌詞も、作詞者児玉花外の了解のもと八十が補作している。

萩原朔太郎 (1886-1942) 『廊下と室房 : 随筆評論』 昭和 11(1936) 年 5 月 第一書房刊 四六判 カバー、帯付 1 円 50 銭 MB100/HA1-24//W

詩人萩原朔太郎の最初の随筆集。内容は『朝日新聞』その他の新聞雑誌に発表された随筆評論 35 篇。随筆のほかに作家論『芥川龍之介の死』、歌人論『悲恋の歌人式子内親王』などが収録される。「著者のような人間は、自己を語る以外には興味がなく、他の何事を書いた所で、結局やはり自分を語ることになってしまう。そこでこの書には、多くのちがった標札を掲げたところの、多くのトピックを持つ室房があり、各自に個別して居るけれども、同じアパートの屋根の下で、廊下が一筋に通ずるのである。」と自序にあるのが書名の由来である。

佐藤春夫 (1892-1964) 『退屈読本』 大正 15(1926) 年 11 月 新潮社刊 四六判 布装 帯付 (当館所蔵本にはなし) 2 円 20 銭 MB100/SA26-34//W

佐藤春夫の評論随筆集。第一評論集『芸術家の喜び』(大正 11 年) の大部分を再録し、大正期の創作以外の文章を集大成した。作品の月評、観劇記、人物評、展覧会の批評、身の上話、書評、日記、芸術論、活動写真の感想、アンケートなど多種多様な内容が自由奔放な文体で綴られている。昭和 17(1942) 年 4 月に文庫本の体裁に合わせて本書収録の文章を取捨選択、再編し、自叙を新たに付して『新編 退屈読本』が創元社より『創元文庫』の 1 冊として刊行された (当館未所蔵)。また昭和 53(1978) 年には本書を底本にした上下本 2 冊が『冨山房百科文庫』に収録された (当館上巻のみ所蔵)。

室生犀星 (1889-1962) 『鳥雀集 (とりすずめしゅう) : 拾遺抒情詩集』 昭和 5(1930) 年 6 月 第一書房刊 四六変形判 紙装 函付 1 円 80 銭 MB100/MU8-28//W

この集は『抒情小曲集』、『青き魚を釣る人』の拾遺というべきもので、これら 3 冊合わせて「抒情小曲」時代の作品ということができる。筑摩版『室生犀星全詩集』(1962 年刊) で著者自身が書いた解説では「大正 4 年〜大正 6 年作」と書かれているが、この集の冒頭にある通り著者の 20 歳台前半 (明治 42 年から大正 2 年) 頃の作品とみるのが一般的である。初版は 1500 部発行。昭和 10 年に改装廉価版が発行されている。扉には「なににこがれて書くうたぞ 一時にひらくうめすもも すももの蒼さ身にあびて 田舎暮らしのやすらかさ けふも母ぢゃに叱られて すもものしたに身をよせぬ 室生犀星」との著者自筆の書込みがある。

土屋文明 (1890-1990) 『韮菁集 (きゅうせいしゅう)』 昭和 20(1945) 年 3 月 29 日後書 青磁社刊 (ただし未刊) 文庫判 紙装 定価表示なし MB100/TS6-16//W

土屋文明の第六歌集。文明が陸軍省報道部臨時嘱託として、昭和 19 年 7 月から 12 月まで中国各地に出張した旅行 (俳人加藤楸邨と歌人石川信雄が同行) 中の詠作をまとめたもの。

『韮菁集』には 3 種類の初版本があるが、本書は以下に紹介する未公刊本にあたる。

・未公刊本　奥付なし。後記に昭和 20 年 3 月 29 日付とあり。「青磁社版」と表紙に記載あり。647 首収録。カバーの「韮菁集」の標題のあとに「支那歌集」との副標題がある。なお、未公刊本は青磁社で戦争中の昭和 20 年に印刷が出来ていたが、公刊発売直前に終戦となったため、内容を顧慮して発行中止となった。後の 2 点は、同一内容の別本である。奥付あり。後記なし。547 首収録。

・札幌青磁社版 昭和 21 年 7 月 5 日、札幌青磁社發行、定価 7 円 (税共)。当館所蔵本 (MB100/TS6-5//W)。

・東京青磁社版 昭和 21 年 7 月 15 日、東京青磁社發行、定価 7 円 (特別行為税共)。当館未所蔵。

与謝野晶子 (1878-1942) 『春泥集』 明治 44(1911) 年 1 月 金尾文淵堂刊 四六判 布装 天金 函付 1 円 装幀：藤島武二 挿絵：中沢弘光 MB100/YO7-18//W

与謝野晶子の第九歌集。613 首を所収。上田敏が序文を寄せており、その中で晶子を平安時代の才女、紫式部や清少納言などと比肩した後、「日本女詩人の第一人、後世は必ず晶子夫人を以て明治の光栄の一とするだらう」と賛辞を贈った。この時晶子 34 歳、若干 24 歳で『みだれ髪』によって近代歌壇にその名を刻んだ晶子が、三十代に入った女性の内省する姿や苦悩を色濃く表現した歌集となっている。新詩社の仲間の脱退、雑誌『明星』の廃刊などで失意の渦中にいた夫、鉄幹との生活の中で感じる悲哀を表す歌もある中で、「三十路をば越していよいよ自らの愛づべきを知りくろ髪を梳く」といった『みだれ髪』収録の「その子二十櫛にながるる黒髪のおごりの春のうつくしきかな」で表現された若さに対する自信とは異なる、年輪を重ねた女性の誇りやしたたかさを感じさせる歌もある。

与謝野晶子 (1878-1942) 『明星抄』 大正 7(1918) 年 3 月 金尾文淵堂刊 菊判 和紙装 大高檀紙使用袋付 上下 2 冊 定価表示なし 装幀：平福百穂 MB100/YO7-19//W

表紙は上巻が淡紅色、下巻は鼠色で、それぞれ表裏にわたって王朝貴族男女像を銀刷し、表紙左上題簽に晶子自筆の題字を木版印刷してある。本文は厚手の和紙に平福百穂の手になる、花絵を中心に京都の風物 (橋・塔・千鳥など) をあしらった絵柄の下絵が木版雲母刷り (きらずり・雲母粉を用いた刷りをいい、粉の粒がきらきらと光って見える) でなされている。その上に著者自選、自筆の短歌を 1 頁に 1 首ずつ散らし書きに木版印刷されている。本文紙 50 枚の下絵が全て木版雲母刷りのものと、始めと最後の 10 枚が木版雲母刷りで、残り 30 枚が淡い色刷りのものと、2 種類の刊本があることが確認されており、本学所蔵本は前者に当たる。上下各 100 首、計 200 種を収め、晶子 40 歳、熟年期の自選歌集となっている。たいへん高雅で美麗な装幀で、和装の美術的歌書としても出色のものである。

長塚節 (1879-1915) 『土』 明治 45(1912) 年 5 月 春陽堂刊 菊判 紙装 函付 1 円 10 銭 装幀：平福百穂 MB100/NA8-6//W

『東京朝日新聞』明治 43 年 6 月 13 日〜11 月 17 日まで、漱石からの依頼によって 151 回にわたって連載された、長編小説。当時の読者にはあまり喜ばれず、予定をはるかに超過して連載されたが、著者による、全文学作品の到達点ともいえる作品である。

漱石による『「土」に就いて』という序文がある。以降、文庫本や各種全集に多く収録され、普及した。

泉鏡花 (1873-1939) 『鴛鴦帳 (おしどりちょう)』 大正 7(1918) 年 6 月 止善堂刊 四六判 函付 1 円 50 銭 表紙、函の著者表記：鏡花小史 奥付の著者表記：泉鏡太郎 装幀：小村雪岱 MB100/IZ1-23//W

この作品は、東京神田美土代町の止善堂より書き下し単行本として刊行された。その後、大正 9 年 10 月春陽堂の作品集『銀燭集』に収録、同年春陽堂版『鏡花全集第 1 巻』に収録されている。本作品の「序」によると、大正 6 年中に完成する予定であったが、脱稿したのが大正 7 年 5 月であった。そのため、同年 6 月の刊行となってしまった。その経緯については、「序」に詳しく鏡花小史という署名で著者自ら事細かに記している。

鏡花は、自分の作品に鏑木清方等多くの著名な画家に装幀をさせ、美しい絵を描かせていることで有名であるが、本書の装幀は、日本画家小村雪岱になるもので、本の表裏の見返しには、華麗な絵 (木版画) が施されている。大正 7 年 (1918 年)7 月 30 日発行読売新聞掲載の止善堂の広告によると、見返しの木版画は二十数度刷り、見返扉の絵については、木版十度刷りとの記述がある。雪岱は『日本橋』以来、泉鏡花作品に 20 冊以上の装幀を手がけているが、中でもこの絵は、作品に書かれた二つの場面が表裏一体となって描かれ、それが作品との絶妙な印象を与えている。雪岱による鏡花作品の装幀のなかでも、非常に格調が高く特に人気の高いもののひとつである。雪岱の雅号は鏡花より受けたもので、鏡花と雪岱の親交は一生続いた。

泉鏡花 (1873-1939) 『友染集』 大正 8 年 1 月 春陽堂刊 四六判 函付 2 円 80 銭 奥付の著者表記：泉鏡太郎 装幀：小村雪岱 MB100/IZ1-24//W

『春陽堂書店発行図書目録』(1991 年 6 月刊) によると、書名は『鏡花文庫友染集』となっている。春陽堂は、これ以外にも鏡花の多くの作品集を当時流行した『袖珍文庫』のようなシリーズとして『鏡花文庫』と名づけ刊行している。この『友染集』には、明治 38 年から大正 7 年にかけて『文藝倶楽部』や『中央新聞』などの雑誌、新聞に発表された『悪獣篇』、『高桟敷』、『紅提灯』、『萩薄内證話』、『木曾の紅蝶』、『町雙六』、『二人連れ』、『卯辰新地』、『繼三味線』、『黒髪』、『友染火鉢』、『茸の舞姫』、『稽古扇』、『天守物語』の 14 編の作品が収録されている。

これらの作品の中でも、『天守物語』は、原典を『老媼茶話』(柳田国男・田山花袋校訂『近世奇談全集』明治 43 年 9 月刊続帝国文庫 47) を元にして創作した戯曲といわれているが、鏡花の生存中には上演されることはなかった。最初の上演は、昭和 26 年 10 月新派の上演で、それ以後新劇、歌舞伎など数多く取り上げら

れ、今でも大変人気のある演目である。なかでも坂東玉三郎による公演は、彼の演ずる主人公の富姫の絢爛さ、妖艶な美しさは、台詞の響きもあいまって観客を鏡花の世界に引きずり込む大きな役割を果たしている。

見返しには春蘭、裏見返しには水引やイヌタデ等の秋草を描いた美しい絵 (木版画) が描かれている。この絵は、装幀を手がけた日本画家の小村雪岱が描いたものである。

井伏鱒二 (1898-1993) 『ジョン萬次郎漂流記 : 風来漂民奇譚』 (記録文学叢書 第 8 巻) 昭和 12(1937) 年 11 月 河出書房刊 四六判 紙装 50 銭 MB100/IB3-17//W

土佐の漁師萬次郎 (1827-1898) が 14 歳の時に仲間とともに漁に出て漂流し、無人島に漂着後アメリカの捕鯨船に救助される。アメリカでの生活を体験し、やがて船乗りとなった萬次郎は、アメリカの新知識を携えて鎖国下の日本に帰って来る。ジョン萬次郎の数奇な生涯を描いた伝記小説は記録文学叢書として刊行され、第 3 回直木賞を受賞している。

表紙の題字の下に風来漂民奇譚とあり、自序で井伏はこの小説がめでたしめでたしで終わっているのは読み物として物足りないようにおもわれるが、「漂流譚の慣わし」であると記している。